

社会科学習における人物指導の研究（中）—高木貞治の幼少期に影響を与えた人々—

社会科学習における人物指導の研究（中）  
—高木貞治の幼少期に影響を与えた人々—

高 橋 彰太郎

“The Study of Historical Persons in Social Studies (Vol. 2)  
—The People who affected the Childhood of Teiji Takagi—”

Shotaro Takahashi

Abstract

This is a second volume of “The Achievement of Teiji Takagi who contributed to the Development of Modern Cultures”. It is a study of the people and the educational environment on the childhood of Teiji Takagi that helped to stimulate and develop his excellent talents.

はじめに

歴史的分野の「国家社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした人物をその時代や地域との関連において理解させる学習」の具体的指導に関わる研究である。筆者は既に本学紀要に、(1) 歴史的分野において人物を取り上げる意義、(2) いつ、どのような業績を挙げ、社会的にどのような貢献をしたか、を報告した<sup>1)</sup>。今回は、対象とする人物の生き方とその背景を明らかにすべく、幼少期に影響を与えた人々と教育制度に焦点を当ててみたい。

明治のはじめ我が国に西洋数学をとり入れたのは菊池大麓〔1855（安政2）年—1917（大正6）年〕であり、藤澤利喜太郎〔1861（文久1）年—1933（昭和8）年〕がそれを引き継いだ。そして両者の教えを受けた第三の人物として高木貞治が現れ、世界の数学界に貢献する業績を挙げた。

世界の数学史の中で十九世紀の前半において決定的な進歩をもたらした、その「高木・アルチンの類体論」は、以後の数学研究の発展を一挙に推し進める極めて重要な理論であったといわれる<sup>2)</sup>。

この現代数学を発展させた高木貞治が、どのようにして出現したのであろうか、どのような生い立ちの過程をたどったのであろうか、を究明したい。

高木貞治は自ら「現代日本の百人」<sup>3)</sup>の中で次のように述べている。

私は明治八年に岐阜県の農村で生まれました。郷里の小学校、岐阜の中学校、京都の高

等学校を経て、東京、ベルリン、ゲッチンゲンの大学で数学を専攻、昭和十一年まで東京大学で数学の講座を担当した。(以下略)

また雑誌『学図』に寄稿した「中学時代のこと」<sup>4)</sup>には、

わたしは、岐阜県の農村に生まれて、十一歳の年に郷里の小学校上等科七年生前期というものを卒業か中退かして、明治十九(1886)年六月に岐阜の中学校に入った。(以下略)

と記している。

この二つの自己紹介は「どのような生い立ちであったか」の問題が表面的には明らかになるが、歴史学習における人物がどのような時代にどのような生き方をしたかを明らかにするには不十分である。地域や時代背景の中で苦楽を乗り越えて生き、どのような業績を挙げたのかを明らかにすることが歴史学習の視点だからである。

そこでここでは、次の視点を設定して問題の究明を図ろうと考えた。

- 1) 農村の生まれというが、どのような環境の農村に生まれたのか。
- 2) 家族や先祖はどのような人たちであったのか。
- 3) 優れた才能に、どのような人々が文化的刺激を与えたのか。
- 4) 当時の教育制度はどのような状況であったのか。
- 5) これらの環境の中で高木貞治はどのような生き方をしたのか。

## 〔1〕高木貞治の生まれた環境

### 1. 出生地の地理的環境

高木貞治の出生地、本巢郡糸貫町数屋は岐阜県の西南部で岐阜市西北西11Km、大垣市の北北東13Kmのところにある。濃尾平野の北西部で西濃平野の北端ともいえる位置である。根尾谷断層で知られる根尾川が根尾村の山々の間を曲流し、平野部に出る地点が本巢町山口であり、山口で根尾川が分流して糸貫川や藪川となり、分流地点に堰が設置されている。高木の出生地はここから南へ4 Km、藪川から東へ0.8Kmの地点にある。

ところで、平野部を南下する根尾川は、過去幾通りにも流路を変化させてきた。変遷の跡をたどると、古代には山口から東南に流れた古根尾川筋が本流であった。また962(安和2)年、新年を祝った催馬楽に「席田の席田の伊津貫川にゃ住む鶴の住む鶴の千歳を予ねてぞ遊びあえる」と歌われる糸貫川が、室町時代後期まで本流となり長良川に合流していた<sup>5)</sup>。そして現在の藪川に河道が定まったのは1530(享禄3)年の大洪水以後である。この洪水により大野郡長瀬七郷のうち藪村を押し流して新たな藪川の河道ができ、揖斐川に合流する河川となった。

またこの洪水のために高木の出生地数屋村は上流・下流の村々と共に大野郡の飛地のようになった。しかし藪川の河道ができて根尾川の水は依然藪川と糸貫川の両河道を流れ、大

表1 江戸末期～明治中期 糸貫川・藪川流域災害年表

西 暦(年)	年 号(年)	自 然 災 害 の 内 容
1815	文化12	6月猛雨3日間 床上浸水
1819	文政1	6月大地震
1825	文政8	7月糸貫川大洪水
1830	天保1	天候不順
1831	2	天候不順
1832	3	12月大雪 積雪4尺
1833	4	4月大地震
1834	5	9月14日～10月12日たびたび大洪水
1835	6	早魃
1836	7	大雨
1837	8	8月暴風雨 糸貫川洪水 曾井中島破堤
1838	9	4, 5月大出水
1843	天保14	9月大降雨（3日間）糸貫川決潰
1846	弘化3	糸貫川筋洪水
1847	4	3月24日大地震（善光寺地震）4月台風倒家多し
1849	嘉永2	7月暴風雨，糸貫川，藪川切れ込み家屋浸水，稲作被害
1850	3	8月洪水
1852	5	藪川決潰
1853	6	空前絶後の大早魃 85日間雨なし 番水26回 地震
1854	安政1	6月洪水糸貫川破堤 7月洪水 7月地震
1858	5	洪水 7月27日大風
1860	万延1	5月暴風雨大出水，橋流出 麦作大凶作 9月洪水
1861	文久1	降雪立木倒れる
1865	慶応1	5月～8月降雨なし，大早魃 番水60回
1866	2	8月台風 豪雨，9月27日台風 稲みのらず
1868	明治1	5月～7月大雨 冷氣 田植は綿入れを着る
1870	3	9, 10月大出水（藪川）
1873	6	10月大暴風雨
	7	9月糸貫川沿岸洪水 堤防破壊
1876	9	9月出水 稲作被害受く
1877	10	10月出水
1878	11	9月諸川出水 不作
1880	13	5月地震
1881	14	6月大出水 大暴風雨
1882	15	7月大出水
1884	17	7月大出水
1885	18	1月地震，7月早魃 8月大出水
1888	21	7月大出水 8月暴風雨大洪水
1889	22	強震あり
1891	24	濃尾大震災おこる

\* 『岐阜県史』通史編 近世下，『岐阜県治水史』，『糸貫町史』通史編および史料編，『糸貫川麿川史』，『山添村志』をもとに作成。

雨のときには、本巢町山口から南東の古根尾川に、そして中央部を流れる糸貫川に、さらに南西部の藪川へと流れていた。

根尾川扇状地とは本巢町山口を扇頂として、半径8 Km、扇の角度70度位の広がりでおおむね1/220から1/320の緩傾斜をもつ。この扇状地の命脈的河川である糸貫川は、灌漑用水として利用される<sup>6)</sup>。

扇状地中央部を流れる糸貫川から東西の耕地に水を引く用水を井水と言ひ、江戸時代から井水の整備とともに稲作農業地帯として拓かれていった。しかし、井水による灌漑では水の配分をめくり水論が生じ、為政者を巻き込んで争われたこともあった。

江戸時代初期の1641（寛永18）年、幕府代官岡田将監の裁きで糸貫川筋の東側にある席田井水方を6分、西側の真桑井水方を4分の用水配分が決められた。この割合は席田井水方2万4千余石、真桑井水方1万3千余石の農地を基準にしたものであるが、幕領や岡田将監など旗本の土地が多く存在する真桑井水方の取水が有利になっている。

扇状地特有の渇水期には、水配分規定である「番水」で灌漑をしている。すなわち、日照りが続く年には番水を公示し、席田井水40時間、真桑井水32時間を交替で取水するという方法が番水なのである。しかも、この番水は幹線から分岐する数多くの支脈の各々に番水規定が存在し、現在もこの慣習は存続している。網状に張りめぐらされた支脈の各々の用水路には人々の利害が複雑に絡み合い、争論は極めて多く繰り返されてきた。また洪水による決壊など被害が生じた際の復旧工事も厳密な慣習に従って行われている<sup>7)</sup>。

このように灌漑用水に問題が生じた時、解決を図るための組合が存在し、それは井水頭が両井水に20名位で組織され、さらには各村には井水世話役が置かれ、問題解決や慣習確認をして用水路の維持管理を行っている。高木貞治の生家も代々先祖が世話役であり、貞治の弟保吉、その子英雄も井水管理組合真桑井水理事長を務めた。

## 2. 出生地周辺の災害と推移

根尾川扇状地を流れる古根尾川、糸貫川、藪川の三河川は中世末に固定化するが、江戸時代以後になるとこれら河川を人為的に制御するようになる。すなわち江戸時代以後、自然が主体で人間が順応していた時代から人間が主体となり自然に制約を加える時代が到来する。巨視的に大規模な河川関係工事の推移をみるならば、次のようなものがある。

- 1) 糸貫川、藪川の大取払い、1705（宝永2）
- 2) 宝暦の木曾三川工事、1753（宝暦3）－1755（宝暦5）
- 3) 明治の木曾三川工事、1878（明治11）－1912（明治45）
- 4) 大正、昭和前期の工事

これら継続的な工事によって、昭和年代になりようやく洪水対策は落ち着きをみるに至った。しかし、洪水対策が為される一方では日照りや濃尾地震などの自然災害が発生し、この

地域の人々に平穏な生活をさせなかった。

「環境が人を作る」と言われるように、高木貞治の人となりに影響を及ぼした環境の一つとして、扇状地における自然災害が挙げられよう。

江戸時代後期からの災害を年表に整理したものが表1である。

災害年表の事項に出水、洪水、破堤、浸水、地震、大風、暴風雨、番水、旱魃、飢饉などが眼につき、この地域はあらゆる種類の災害が年毎おとずれるという感さえある。これら洪水などの災害は、多大な被害をもたらす厳しい環境にもかかわらず、隠忍自重、苦しみを刻む試練を繰り返し享受しながら人間性を鍛えてきたのだと考えられる。

## 〔2〕高木貞治の生い立ちと家族

### 1. 高木家代々の人々

高木家に系図は存在しないため、本田欣哉が1961（昭和36）年—1975（昭和50）年に調査研究して著した「高木貞治の生涯」<sup>8)</sup>を基礎資料とし、さらに生家の位牌や墓標、1975（昭和50）年以後発見された文書類、貞治の甥夫婦や姪への聞き取り調査を資料として検討する。

#### （1）揖斐、古田家から養子の治左衛門前後

高木家の先祖ではっきりしているのは、1751（寛延4）年死去の高木治左衛門であり、揖斐の古田久兵衛方から養子に來た人物である。治左衛門の一代前の人物名は明らかではないが、高木家の土蔵には「宝永の大取払」の一環の工事関係絵図〔1705（宝永2）年〕<sup>9)</sup>が所蔵されているので、治左衛門の先代（養父）は治水事業に関与していたものと推測できる。

さて、高木家の位牌に記された「イビ古田久兵衛からの養子」の治左衛門は、名字のある家から來た人物であり、それなりの活躍があったと思われる。その治左衛門の子、源十郎が家を継ぎ、長命の人であった。源十郎は父の死没した翌年、1752（宝暦2）年の『勘定目録』<sup>10)</sup>に「数屋村年寄源十郎」と名を連ね、以後51年の歳月を生き、1803（享和3）年に没している。源十郎の晩年は生家のすぐ裏に隠居したといわれ、現在では隠居所が分家となっている。大きな隠居所をもった源十郎とその子初代勘助の時代が、高木家の隆盛の極みであったと思われる。

#### （2）数屋村勘助三代

源十郎の子から三代が勘助を名乗ったが、この三代続く勘助が貞治の生涯に重要な影響を与えた人物であった。高木家の墓地を尋ねると、1)「高木治左衛門正人」、2)「高木源十郎」、3)「高木勘助正記」、4)「二代高木勘助」、5) 貞治建立の「三代高木勘助」の墓碑がある<sup>11)</sup>。

初代勘助〔1745（延享2）年—1812（文化9）年〕は、1784（天明4）年6月から7月に

かけて上流の高屋村と井水の配分について争った出入文書<sup>12)</sup>にその名を連ね、また翌年の全国的旱魃による大飢饉の折の文書「願上申一札」から「冬十月より春三月渴水につき御検分、水丈分量御定」に至る四通<sup>13)</sup>に庄屋として現れている。

後年、1805（文化2）年4月および5月には、藪川の治水工事に関係する「堤石籠伏繕普請賃金受取証文」<sup>14)</sup>を「数屋村庄屋勘助」の名で出している。また1808（文化5）年の「藪伐採願」<sup>15)</sup>にも庄屋として勘助の名がみられる。高木家に残存する最初の文書と最後の文書とは24年間も隔たっており、この長期に渡り勘助は村役として活躍していた。

別の視点からみた勘助について、本田欣哉は次のように記している<sup>16)</sup>。

初代勘助は頭の切れる人物だったようで、酒造業により大いに産を成した。広大な田畑を所有し数屋から1Kmまで他人の土地を踏まずに出られたという伝説を残している。

ところで高木家の同一敷地内には野川家が居住していたが、このことについて聞き取り調査を行ったところ、

尾張藩の世臣で藩医であった野川豊寿（通称信右衛門）が中年の頃、故あって致仕し、美濃に居住することとなった。医をもって村人の世話をすかたわら、1798（寛政10）年に美濃の地で遠州流宗匠（初代）となった。二代目痴堂（通称秀平）、三代目湘東（通称杏平、貞治の野川塾の師）、四代目中州（通称杏太郎）まで数屋において代々開業医を営んでいた<sup>17)</sup>。

ということであった。

初代勘助は野川豊寿が数屋村に居住する便宜を図り、家屋敷を提供したと言われている。1889（明治22）年の「地籍図」<sup>18)</sup>を見ると、90cm幅の溝で囲まれた区画内に野川家と高木家、そして隠居といわれる分家が存在している。これら3軒の家は、高低の無い平地に石を並べて境界とする簡易な境があるだけであり、屋敷の一部を割いて区切り、野川家が居住していたようである。

なお、野川豊寿が藩医を致仕して農村へ身を隠すように移り住んだ理由は不明であるが、勘助が豊寿という医者が無医村に移り住ませたことには意義があろう。また豊寿は初代遠州流宗匠として茶華道を広めると共に、私塾を開き、漢学や書画を教授するなどして数屋村の文化的中核となった。

このように初代勘助は優れた手腕や秀でた識見のある人物であったと思われ、子孫が勘助の名を襲名して彼の成功にあやかろうとしたことは理解できる。

二代目勘助〔1803（享和3年）－1853（嘉永6）年〕は、1842（天保13）年3月の井水関係文書<sup>19)</sup>に「年寄勘助」として名がみられるが、先代の成した財産を守りきることができず、1843（天保14）年破産してしまった。前出の災害年表にみられるように、天保年間はこの地域でも自然災害が幾度も襲った厳しい時期であり、こうした社会状況の中での破産であったと思われる。二代目勘助は妻子を数屋村に残し、大阪四天王寺の真光院で祐筆などをし

てその地で没した。

三代目勘助〔1837（天保8）年—1901（明治34）年〕（以下、勘助とのみ表示）に目を向ければ、彼は6才の時に酒造業が破産するという悲痛な体験をした。この年に生まれたつね（貞治の実母）と共に母親たかの手一つで育てられ成長した。青年期の二人は奉公に出て家計を助け、「苦難の中で実直に生きる」とか「厳格な努力型の人格」を身につけ、家産回復に執念をもち刻苦勉励した。

1862（文久2）年に「家作許可一札」文書<sup>20</sup>を提出していることから、25・6才頃数屋村へ戻ったと考えられる。そして、1864（元治元）年には、井水の水争いに関わる「不法出入」文書<sup>21</sup>を「庄屋勘助」の名で1月から3月にかけて下書きし、作成している。

1868（明治元）年、勘助33才、つね25才の時に、従妹（伯母の子）のいおが女兒を出産し夫に死別したため、勘助はいおを妻として迎えた。後に述べることになるが、後日いおの娘しなよを高木家の分家として建て、さらにしなよの長男保吉を貞治の弟とした。

1869（明治2）年、美濃国大野郡数屋村が笠松県御役所に提出した『村明細帳』<sup>22</sup>に「年番年寄勘助」と名を連ねている。また1881（明治14）年、戸長名で提出された『数屋村略誌』<sup>23</sup>にも、民林所有者68名の代表として名を連ねている。

このように勘助の代には、村での地位も家産もある程度までに回復したといえる。

この勘助こそが貞治の養父であり、広い視野をもち、いち早く幼少の貞治の才能を見抜き、厳しく教育を施し、家産を惜し気もなく投げ出して、神童といわれた貞治に大成の道を歩ませた最大の功労者といっても過言ではない。なお、父親勘助の影響は貞治の成長過程の中で記述することにしたい。

## 2. 貞治の誕生と家族構成

貞治は1875（明治8）年4月21日、当時の岐阜県大野郡数屋村557番地（現在、本巣郡糸貫町数屋）高木勘助方で生まれた。実母つねは前年33才で本巣郡生津村柱本（現在、本巣郡北方町柱本）の木野村光蔵に後妻として嫁いたが、身重になってからある事情で実家に戻り貞治を生んだ。そして、そのまま実家にとどまり、貞治の世話に一生を捧げ数屋の地で生涯を終えた。実家の当主、勘助といお夫婦には実子が無かったので、貞治はこの夫婦の長男として入籍された。

貞治から見た家族構成は、70才の祖母たか〔1805（文化5）年—1893（明治26）年〕、38才の養父勘助〔1837（天保8）年—1901（明治34）〕、30才の養母いお〔1845（弘化2）年—1922（大正11）年〕、34才の実母つね〔1841（天保12）年—1925（大正14）〕になり、生まれたばかりの貞治は成人4人に囲まれて養育されたのであった。

当主である勘助は、「数屋村年番年寄」の後、1871（明治4）年4月から数屋村役場に勤務し、能吏として活躍した。さらに後年、度々の行政改革が為されていく中で、1884（明治

17) 年官選戸長制度に改められた「大野郡数屋村外五カ村戸長役場」第六大区、十七小区の収入役に就任した。なおこの役場管内の戸数は384戸で人口は1831人であった。

実父に当たる木野村光蔵は1819（文政2）年生まれで、貞治誕生時には56才であった。当時、3町5反位の田地を所有し、小作人や雇人を使用し農業をしていた。また村の世話役でもあったので、勘助同様な道筋を経て役場勤務をしていた。人柄は「温厚な人物」であり、また「頭がよかった」と言われた人であった。

### 3. 貞治の祖母と母たち

二代目勘助の妻たか（鷹・多可）は家業没落後、子供の勘助（当時6才）とつね（当時新生児で0才）の養育や対外的交渉を女手一つでやり抜き、母屋と土蔵、少々の田畑を残すのみの高木家を守りきった傑物ともいえる女性である。

伝説的に「男勝りの女性であった」とか「たかさんは災害で毀れた板橋や崩れた用水路の復旧工事の計画や必要資材の見積り、計算などは村の役をしている男より出来る人であった」と伝えられている。

このような女性の子、つね（貞治の実母）は計算の出来る母親仕込みで、つねもまた傑出した女性であったという。たとえば「何年の何月何日にどういうことがあったという記憶は実に正しくはっきりしていた」「貞治博士の少年時代の作品が多く残存しているのは、母親の愛情とそして几帳面な性格のつねさんでこそ保存されたのである」などと言われている。

又養母のいお（勘助の妻）は女傑といわれた二人と対照的な人であったようである。「外の仕事には出ないで、家事に専念された物静かな人であった」「円満な家庭となる調整役として存在された人だった」と言われている。

これら三人の女性と当主の勘助は、悲嘆の苦しみを嘗めた祖母たかを中心に高木家の再建という目標を持って、忍耐強く努力した人々であった。この女性たちは厳しい生活の中で心の葛藤を癒す場を信仰に求め、幼少の貞治を伴い寺参りを行ったようである。

高木家のすぐ背後に曹洞宗千光寺があり、100m西に浄土真宗円勝寺の道場、200m東に浄土真宗長福寺、そして高木家の菩提寺である浄土真宗光照寺が4 Km西の揖斐郡大野町宝来に在るなど、高木家と種々の面で関係の深い寺院が多く存在している。

貞治が幼少の頃から聡明な子供であったと言われる例話に、4・5才の頃「聞いてきたお説教をこたつやぐらの上に坐って、そっくりそのまま聞かせた」とか「親鸞聖人の『御伝鈔』を大部分暗唱しておとな達を驚かせた」という話がある。貞治の祖母や両母の信心深い生活は貞治に信仰心を育てる面よりも、脳への刺戟、遊び的記憶力の練成などの機会となり、「話を聞く、記憶する、記憶したことを表現する」など、知能を練磨する面で影響を及ぼしたと考えられる。



### 〔3〕高木貞治の幼少期の文化的刺戟

#### 1. 最初の影響者 野川湘東

生れた時の貞治は、体格的に普通の赤子よりやや小さく、その後も丈夫ではなかったので外で遊ぶことは少なかったという。

実の子に対する以上に愛情を傾注する勘助、そして祖母や母などから文字を習い、昔話を聞き、絵草紙を見るなどして家の中で過ごす生活が主であった。また貞治は先述したように幼少期から非常に優れた記憶力の持ち主であり、成人との生活が多い子供であった。貞治の記憶力や聡明な資質に夢を抱き、家族は4・5才頃から隣家の野川私塾へ入塾させた。

貞治が入塾した時の師は三代目の野川湘東(諱は任、字は子敏、別号松琴齋一叟)[1839(天保10)年—1917(大正6)年]であった<sup>24)</sup>。湘東は進取の気概をもって、江戸末期の学問を豊かに吸収した医者であり、文化面での指導者でもあった。この湘東が幼少期の貞治に少なからぬ影響を与えたと思えるので、次に湘東の経歴を考えたい。

湘東の幼年期は、父である痴堂が自宅で開いている野川私塾で、貞治の養父勘助とともに読み書きの基礎を学んだ。12才頃から、当時美濃・尾張で一流の師であった加納藩儒官吉田東堂に漢籍を、森春濤に漢詩、村瀬秋水に画を学び、幅広い教養を身につけた。

湘東は、1859(安政6)年、20才で医術を学ぶため大垣の江馬塾に入門し、大垣藩医江馬活堂[1806(文化3)年—1891(明治24)年]に学んだ。岐阜県内で著名な江戸後期の西洋医学者には江馬蘭齋、小森玄良、坪井信道の名が挙げられるが、江馬活堂は蘭齋の孫に当たる。活堂は飯沼愨齋に本草学を学び、大垣藩医となり、やがて江戸の医学館で講義をした程の人物で、祖父蘭齋に次ぐ優れた人物であった。また活堂の長男信成[1826(文政9)—1874(明治7)年]は京都の広瀬元恭塾に学び、次男の春琢は緒方洪庵の適塾で学んだ後、父活堂をよく助けたので、江馬塾は門下生も多く隆盛であった。江馬塾に入門した湘東は、三年目には塾頭を務め、活堂門下生の『格物堂社中門人姓名録』<sup>25)</sup>を刊行した。

その翌年の1859(文久2)年、湘東はオランダの軍医ボードインが長崎に来ることを知り、遠路長崎へと赴き、ボードインから医術を学んだ。1866(慶応2)年、ボードインの帰国や幕末の風雲を避けてか、その後、湘東は故郷の数屋村に戻り、父の医業を手伝い医者としての実習を積んだ。

しかるに湘東は研学の念やまず、自由に西欧の医学が学べるようになった明治初め頃、折々東上してボンペに学んだ桐原玄海に外科を、順天堂の基礎を築いた佐藤泰然に眼科を学び、以後特に眼科に心を寄せた。そして、故郷の数屋村で病室棟などの施設を充実させ、眼科医・野川病院を開業し、繁盛させた。

このように湘東が医家を継ぎ、眼科医として立つまでの経過をみると、先ず人間形成のための基礎的な勉学をした11才までの幼少時代、12才から自らの内に潜む個性を探りつつ豊か

な文化性を身につけた青少年時代, 20才からの医学に適性を見つけてのめり込んだ少壮時代, そして遂に眼科医として自己実現した壮年時代に区分できる。

この求道の生き方をした湘東は, 漢学や漢詩, 南画や茶華道, 蘭方医学を中心とした西洋医学を身につけた, 幕末・明治初期の文化人であった。政治面には踏み込まず, もっぱら進取の気概をもって学問の道を志す生き方であった。湘東は40才, 貞治は5才という年齢差であったが師弟の出合をし, それ以来貞治が42才の時まで見守り続けた人物であった。

## 2. 野川私塾の頃の文化的刺戟

野川湘東には二男四女があり, この子供の中に貞治も混じり勉学に励んだという。読み, 書き, そろばんに始まり, 『論語』『孟子』『十八誌略』などの素読を受けたようであり, 「高木貞治所蔵」と記された遺品の書籍などから伺い知ることができる。幼少時代の貞治の作品として絵画や書が現存するが<sup>26)</sup>, 書の勉学に焦点を当てて成長の過程を考察したい。5・6才の時に書いた作品三幅を以下に掲げる。

高 樓 満 意 秋 光 冨	五歳童 高木義憲
金 粟 初 開 暁 更 清	五歳童 高木義憲
宿 昔 青 雲 志	宿昔 青雲の志
蹉 蛇 白 髪 年	蹉蛇 <sup>さた</sup> す 白髪 <sup>うち</sup> の年
誰 古 明 鏡 裡	誰古明鏡 <sup>すこ</sup> の裡
配 影 自 相 憐	影を配し 自ら相憐 <sup>あいあわ</sup> れむ

明治壬午土夏日 六歳童 高木貞治書之

(大意)

青少年の頃から, 高くて大きい志を抱き続けてきた。その志は果たすことが出来ず, 白い髪の生える年齢になってしまった。今となっては, 古いがよく写る鏡の中に, 希望が達せられなかった心残り, それにしても自分ながらよく頑張った満足感が入り混ざる複雑な思いで, 年老いた自分の顔を写してじっと眺めている<sup>27)</sup>。

先の二点は, 書写する文字の意味を聞かされ, 年齢を記し, 号を高木義憲とつけてもらい, とにかく文字を書いた作品であると考えられる。そして6才の後半になると, 文字数が多い五言絶句を書いて作品としている。この漢詩は湘東が自分の歩んできた道をふりかえり共感する思いを語り, そして教えながら書かせているように思われる。

師の湘東が, 青雲の志を持って生きよと教え, 養父勘助も同様の気持ちで貞治に接したであろう。

次に示す資料は、貞治が7才と9才の時の遺品であり、自宅での過ごし方を伺い知ることができる。

本願寺聖人御伝鈔 上, 下  
明治十六年一月 本書, 村方道場ニテ借り受ケ書写之  
七歳童 高木貞治書之  
天正十八年北条氏滅亡以後太閤分限帳 自一丁  
至二十丁  
全上家康公ヨリ家人及旗下等ニ御知行御分配アリ其ノ記録  
自二十丁  
至二十八丁  
干時明治十七年三月 学校休業之日 寫之畢  
九歳童 高木義憲書

前者は『本願寺聖人御伝鈔』上下巻を生家近くの浄土真宗円勝寺数屋道場から借用し、それを書き写したものであり。また「明治十六年一月」と記している日付からすると、これは貞治が一色学校に入学した年の冬期休業中のことである。余暇学習として書写を行ったものらしい。知らない文字や文章であっただろうが、祖母や母と一緒に聞いた『本願寺聖人御伝鈔』を書き写しながら未知の世界を切り拓くことを楽しんでいたようである。

後者は「明治十七年三月 学校休業之日」と記されており、今日の春期休業中に自ら選んだ課題学習である。この写本は美濃紙二十六枚に書かれ、一点一画の用筆をまじめに、複雑な文字は総画数を先ず数え、肚に入れてから一気に書きこなしている。貞治はこの内容をどこまで理解していたか、明らかではないが、太閤秀吉、家康について学校で学んだことを思い起しながら、「關八州」「駿河」「大納言家康公」などと正しく書き写している。

貞治の周囲には厳格な養父勘助、進取の気概がある野川湘東、明治の気骨を持った学校の先生などがいたはずであるが、こうした書写を行うことは誰かの指示があったのか、または感化なのかと思われるが、確かなことはわからない。

しかし、貞治自身が学校の休業期間にも脆弱な心や我侷な心に負けない克己心を持ち、刻苦することに挑み、求め、未知の世界を拓くことに喜びを感じていたことは間違いがないだろう。その貞治を師や家族、周囲の人々が無言で励まし、支えていた。とにかく常人とはレベルの異なる聡明さや克己心で、幼少時代から人々の期待に応え得る能力を持っていた貞治であったことを示す資料である。

また1883（明治16）年および1884（明治17）年の学校休業中に自ら選んだ課題で勉学をした続きとなる、1885（明治18）年の試筆がある。

送 尽 甲 申 歳	送り尽くす 甲申の歳
迎 来 十 八 春	迎え来たる 十八の春
人 心 清 似 雪	人心清らかにして 雪に似たり
又 与 早 梅 新	又与に早梅 新たなり

乙酉歳朝試筆 梅東小史

これは貞治が9才となった正月の書き初めである。過ぎ去った年でなく送り尽くした明治17年、そして迎え来たる明治18年などと、自分の気持ちを五言絶句で創作できる成長ぶりである。書かれた漢字も少し崩して筆勢を出した作品となっている。また雅号も師の湘東にあやかって梅東とし、その下に付けられた「小史」の語も微笑ましく、青年期に向かって着実に飛躍していることがわかる。

#### 〔4〕一色学校と高木貞治

##### 1. 貞治の学んだ一色学校

1882（明治15）年、貞治は7才で一色小学校へ入学した。この当時の一色小学校の概略<sup>28)</sup>をふまえて、貞治の勉学の様子をみてみたい。

明治の新政府が行った1872（明治5）年の学制制定により、数屋村・高屋村・有里村の3か村で鸚明学校が、近隣の長屋村外1か村で敬愛学校、見延村外2か村で守恒学校がそれぞれ創設された。1878（明治11）年、これら3校を合併するため見延村一色に校地を造成、平屋建て校舎を建築して一色学校が誕生し、1881（明治14）年には、一棟を新築、玄関、便所なども増設された。一色学校には初等科、中等科、高等科が設置され、その翌年には裁縫科も設けられ、合併を拒んだ随原村随原小学校も統合された。

貞治は現在の一色小学校区の村々が合併し、各科が整備され、学校前に役場も完成した年に入学したのである。役場勤務の勤助と共に貞治は登校し、下校する時は役場に立ち寄り、勤助の執務機の隣で宿題や予習などをし、勤助の帰宅時間を待つのが常であった。貞治が後に『数学小景』<sup>29)</sup>に書いている、東京土産の「十五の駒遊び」をして楽しんだのもこのような時間であったと思われる。

ところで1872年の学制は1879（明治12）年に廃止され、新たに教育令が定められたが、教育令の小学校の学科は読書・習字・算術・地理・歴史・修身等の初歩とし、土地の状況として罫画・唱歌・体操を加え、物理・生理・博物等の大意を加えるものであった。そして学制当時の煩雑な教科目は廃止され、義務教育の学齢は6才から14才に至る8か年であるが、土地の便宜により4か年まで短縮できた。さらに毎年4か月以上授業をすればよいとしたり、学校に入学せずとも別に普通教育を受ける途のある者は修学とみなしたり、教員巡回の方法で児童の教授をさせることもできると定めた。

このようなあまりにも自由主義的であったため、誤解されて様々な面で問題が生じた。このため1880（明治13）年12月には教育令が改正された。改正された教育令は小学校の学期を3か年以上、授業日数は年間32週以上、授業は1日3時間以上6時間以内とし、就学義務が強化された。

このように教育制度・内容が揺れ動く中で、貞治が一色学校で受けた教科や教授内容の記録は残存していない。しかし貞治の実母つねが保存しておいた資料から一色学校の教育内容を伺い知ることができる。

## 2. 貞治の一色学校での履習学科

高木家に保存されていた教科書類を整理すると次のようである<sup>30)</sup>。

### (ア) 『小学入門書』

奥付に「官許 明治八年十二月刻成、編集人名古屋関鍛冶屋町二丁目拾壱番地、二等訓導内海共之、出版人愛知県下設楽郡新城村英壁堂英吉」と記載された、42頁の書である。

序文には「本書小学入門之書ハ・・・」と記載されており、いろは四十八字図が第1頁に扱われ、片仮名、数字図、乗算九九などと続き、単語図第一（糸、犬、錨など）、単語図第二（もも、くり、なし、かきなど）から単語図第八まで掲載される。たとえば単語図をみると「桃、果樹にて四月頃に花咲き、七月頃其实熟せり、味甘し花も亦目を悦ばしむるものなり」と、説明が加えられている。単語図に続いて連語図第一に移り、内容は神人、天地、萬物などが示され、連語図第十になると長さ、広さ、重さ、かさに分けて解説がなされている。たとえば「升=十才を一勺といひ、○十勺を一合といひ、○十合を一升といひ、○十升を一斗といひ、○十斗を一斛といふ」とある。

この書はかなり多数の子供の勉学に使用されたと思われる、表紙が破損し、傷みが激しい。

### (イ) 『小学読本』巻一～巻三

本書は巻一から巻三までであり、「師範学校編纂、明治七年八月改訂、文部省刊行」の奥付をもつ。巻一が42頁、巻二が74頁、巻三が66頁の構成となる。また「一色学校生徒、高木貞治」と自筆署名がみられる。

この教科書の巻一のレイアウトは、絵が上または下にあり、半分強のスペースに文章が印刷されている。たとえば学校の頁を紹介すれば、「學校に教師入り来たり、數多の、男衆と小女子とあり、○此小兒等ハ、皆書を読み、字を習へり、○校内にハ、石盤と、机と書籍あり、○汝ハ學校に行くことを好むか、○汝ハ書を読み、又語を綴ることを能くするや、○吾ハ書を読むことを好めども、未ダ能く読むことを得ず」と、いう外国語

- を直訳したような文体である。
- (ウ) 【苗字尽手本】上・下  
奥付は「師範学校編纂，明治十年六月，文部省刊行」であり，上巻が28頁，下巻が同じく28頁である。
- (エ) 【新撰 圖画初歩 小学校用本】  
「明治十二年六月版權免許，明治十三年一月出版發兌，著者石川県平民三浦源助」の奥付をもつ，29頁の書であり，「所持人高木貞治」の記載もある。
- (オ) 【大成普通畫學本】  
奥付に「明治十五年八月版權免許，明治十六年五月出版，著者徳島県士族守住勇魚，印刷兼出版人大阪府平民水口龍之助」と印刷された10頁の書であり，「takagi」の署名もみられる。
- (カ) 【日本略史】上巻・下巻  
上巻は奥付に「明治九年三月發兌，明治十年五月發兌，明治十三年三月刻成，問目標注著者東京府士族太田謹，名称訓編輯愛知県士族浅野明道，翻刻版書林岐阜県平民岡安慶助」と記載される88頁の書である。下巻は著者・編輯・翻刻版等は上巻と同様であるが，奥付が「明治九年四月發兌，明治十年十二月刻成，明治十三年三月刻成」となり，122頁の書である。
- (キ) 【地理小學】卷之一  
「明治十六年十一月出版，著者若林虎三郎，發兌普及舎」と奥付にみられる。
- (ク) 【萬國地誌略】改正一  
「翻刻師範学校編集」と奥付にある，地理の教科書である。
- (ケ) 【學校用地文學】  
奥付に「明治十七年七月再版，文玉圃蔵梓，纂譯広島県士族関藤成緒，内田嘉一校正，出版人教育書屋，吉川半七」とみられる。
- (コ) 【萬國史略】  
奥付に「明治十年十一月刊行，圭章堂發兌，問目抄解著者広島県士族荒木市太郎，出版人滋賀県平民小川九平」と印刷された，130頁の書である。
- (サ) 【小學化學書】二卷，三卷  
本書は，二卷・三卷が残存するが，一卷がみられない。奥付には「明治十五年五月刻成，ロスユウ氏撰，市川盛三郎譯，翻刻人愛知県平民鬼頭平兵衛，同人同栗田東平」とみられ，二巻が76頁，三巻が68頁となる。
- (シ) 【物理階梯 上 改訂増補】  
奥付に「明治九年二月，文部省，片山淳吉纂」と記載された，126頁の書であり，上巻のみ残存する。また裏表紙には「高木貞治 読習」と書かれている。

(ス) 【SCHOOL COMPOSITION】

奥付に「明治十七年六月，纂者前川源七郎」と見られる，167頁の書である。

(セ) 【spelling book】

奥付に「明治十七年六月，纂者西野駒太郎，発行所河内屋」と印刷された，170頁の書である。

以上の教科書類のうち【小学入門書】を除いた書籍には，高木貞治の署名やゴム印で名前が押されている。したがって【小学入門書】は定かではないが，その他すべては高木貞治が使用した時期があったことは確実である。

教育令で学科とされた読本，習字，地理，歴史，図画，物理，化学，英語の教科を学習したことは明らかである。しかし，貞治が得意とする算術の教科書はなく，また修身や唱歌の教科書も発見できなかった。後日，第三者の利用に供するため譲り渡されたのであろうか，さらなる調査が必要である。

なお【日本略史】以下【spelling book】までは，高木貞治のゴム印に並べ，高木勘助のゴム印もみられる。これはまた後に岐阜尋常中学校で貞治が使用した教科書でも同様である。これは教科書を購入した際に父親勘助が押したものである。貞治の勉学に父親の勘助は強い関心を持ち，厳しく見守る親心の発露を感じる。

### 3. 貞治の一色学校での勉学

貞治の小学校時代の勉学内容を知る上で参考になるのが次の資料<sup>31)</sup>である。

(1) 図画作品

貞治が小学校時代に描いた図画作品が残存する。それらは手本を見て描いた蛙，魚，西洋の婦人，西洋の男性の顔・ちょんまげ姿で着物・下駄・洋傘を杖にした男，水仙，枇杷の静物画，物を持つ手，および足の膝を中心とした精密描写の絵である。作品の右上には教師の評価が朱墨で表示され，100・98・96など90点以上の高得点のものが多い。これらの作品は確かな描写力や細かい観察力などの力が現れている良い作品である。

(2) 「蟻説」

蟻ハ小蟲ニモ其種類甚多ク同數千群ヲナシ每群蟻王アリテ之ヲ統フ其糧ヲ運フヤ荷身二十倍ス雖衆蟻蝟集シ誼々争ハス孜孜怠ラス遂ニ之ヲ巢ニ運フ夏日炎々ノ時タリト雖終日怠ラス勉勵シテ糧ヲ求ムルニ従事ス已ニモ冬天ニ至レハ巢穴ニ蟄居シ嚮ニ積ム所ノ糧ヲ食ヒ數月ヲ經レドモ菜色ナシ嗚呼蟻ノ如キ者ハ虫類中ニアリト雖蜂蝶ノ飢ニ叫ビ凍ヲ嘆キ其翼ヲ毀損シ死スルニ至リテ遂ニ悟ラサル者ト日ヲ同クシテ語ルヘカラス夫人怠惰放逸ニモ後日困難ニ嘆ク者往々之レ有リ其レヲモ蟻ノ行為ヲ目セシムレバ豈愧スベキノ

甚シキニアラスヤ

一色學校高等二年前期

高木貞治

十歳四ヶ月

(3)「源右府論」

夫大鵬ノ風ヲ衝キ上雲漢ニ低ルハ其両翼アルヲ以テナリ 古ヨリ英王明主必ス良輔アリ以テ天下ヲ保安ス猶鵬ノ両翼アリテ以テ飛翔ヲ逞クスルカ如シ故ニ苟モ其翼ヲ絶テハ鵬モ亦翔飛スル能ハス其輔ヲ失ヘハ英王明王又天下ヲ保安スル能ハス 源頼朝一流人ノ身ヲ以テ兵ヲ起シ一敵平氏ヲ亡シ身高位ニ陞リ職將軍ヲ辱クシ以テ天下ノ大權ヲ握ル是皆二弟ノ功勞ニ依ル然ルニ事平クニ及ヒ讒者ノ舌頭ニ惑ヒ二弟ヲ殺害シ其翼ヲ絶チ其良輔ヲ失ヒ恬トシテ怪マス猶彼ノ鵬ノ翼ヲ絶ツカ如シ宜ナル哉其再傳シテ嗣ヲ絶ツヤ

一色學校高等二年前期

高木貞治

十歳四ヶ月

学年と年齢を明記した「蟻説」と「源右府論」である。「十才四ヶ月」を現在の小学校の学年に対応させると第5学年になる。これらを内容的にみると、修身で学んだ内容を基にした場合と、学科の博物や歴史を学んだ内容を基にした場合、または小学読本で学んだ内容を基にして書讀作文の時間に作品化したものかは定かでない。しかし、漢字、漢語を使いこなした内容、形式は大人の基準で書き上げている。

明治前半で教育制度や内容が混沌としている荒々しい教育の時代に押し潰されることなく、逆に急流の岩間を飛び跳ね遡上する魚のように貞治は能力を急成長させてきたと考えられる。この優れた能力を発揮した10才4か月とは、1885年（明治18）年8月であり、高等2年前期課程を修了していた。

当時の一色学校は教育令にもとづき、最低4年を3年に短縮するという改正事項を学力の優秀な貞治に該当させ、高等科に進級させていたのではないかと考えられる。貞治の学力が優秀であったことは言うまでもないが、現在の一色小学校が編纂した『学校沿革史』の「大正七（1918）年六月誌」の箇所に「卒業生中、名ヲ成セル者」があり、次のように記されている。「高木貞治氏。明治十七年六月廿一日ノ日誌ニ示セル處ニヨレハ全日學力優等品行方正ノ廉ヲ以テ文部省ヨリ受賞サル梅檀ハ二葉ヨリ香ハシトカヤ小學校時代既ニ其ノ名ヲ郷黨ニ馳セタリ（以下略）」と<sup>32)</sup>。

貞治が9才2か月の1884（明治17）年に文部省から学力優等の受賞をしていることが記録されているのである。とにかく成績は抜群で品行方正であったことから高等科へも飛び級で進級させられたのである。



飛び級ができる勉学を貞治の立場で考えてみると、絵でも文字でも書けば書くほど上達し、本を読めばそれだけで深く新しいことが理解でき、考えを作文にすればよい文章になったのである。それゆえに机に向かって勉学することは苦痛だとは感じずに、むしろ知的な喜びや楽しみを味わう遊びの境地に浸ることであったのだろう。

このように普通人とは違う境地で楽しめる貞治を神童と題して、『岐阜日々新聞』が1886（明治19）年1月7日付で記事にしている。以下にその原文を示してみよう。

<神童> 美濃国大野郡数屋村高木勘助長男、高木貞治といふ、今年漸く十年一ヶ月と成り未だ乳臭を離れざるも、夙に一色学校に通学し当時既に高等三級の学科を修め頗る穎才の天資なるに加ふるに映雪聚螢の勉勵師父教育の懇切にして大いに学業勇進し正科の外更に英語を研究し愈々奮発し怠らざるにより実に後世頼もしき神童なりと西濃の某より申越されたり

以上、『学校沿革史』の記述や新聞記事から判断しても、貞治は学業極めて優秀であったことを証拠づけている。

低年齢であっても学力が高い貞治を、荒々しい時代や社会の変化が急速に研磨することになった。それは1886（明治19）年の学校令公布による教育制度の改正である。この改正に対して貞治や勘助が如何に対応したかを次に述べてみたい。

#### 4. 学校令の教育制度と貞治

1886年の学校令改正を進学を例にとって簡潔に示すと、小学校、中学校を経て帝国大学に進む場合、尋常小学校から高等小学校、そして尋常中学校を経て高等中学校へ進み、高等中学校の卒業者は帝国大学へ進学できるとした制度改正である。

貞治は明治18年度に高等小学校を修了できる段階に達し、次に進学を考えねばならない時期になっていた。養父勘助は先にも述べたように数屋村外五か村役場の収入役を勤め、国の制度改正の情報が得易い立場であった。学校令改正の動きを公布前から察知しつつ、我が子貞治の進路と照らし合わせて考え、家族と話し合ったといわれる。

貞治の能力や向学心の旺盛さ、それに伴う高木家隆盛の夢を現実のものとするために、前途を見つめて計画的に手だてを講じた。まず第一は、農地と家に関してであり、「高木家の後継者には養子を迎え、貞治は学問の道を進ませる」ということにした。第二に「学資金は貞治名義の田畑をはっきりさせ学資とする」方針をとった。第三は「下宿は親戚筋に依頼し、健康や生活の世話を頼む」ことなどであった。

第一のことにに関して、1885（明治18）年12月、分家（勘助の妻いおの娘）に長男が生まれたので、勘助の二男として役場に届け出て、入籍した。したがって戸籍上は、長男が貞治であり、二男が保吉となる。「兄さん、保っさ」の兄弟の誕生で、以後、二人が世を去るまで

この呼び方で親密に、しかも美しい兄弟関係が続けられた。この貞治・保吉の兄弟関係は、貞治の子や孫に伝えられ、彼らは「父、貞治のふるさと」「祖父貞治のふるさと」と呼んでいる。生家の方でもこれに応え、現在でも関係は続いている。

第二の学資金問題では、高木家の財産が、学資として消費するも可能な貞治名義の田畑と、後継者保吉名義の田畑とに明白に分割された。しかし勘助夫妻、貞治の祖母たか、実母つね、義弟保吉らは、結局、高木家の田畑として守り抜いた。そして貞治に後顧の憂いを感じさせないために、第三高等学校、帝国大学、さらにドイツ留学での学資は総て勘助の力で仕送りされた。後に、貞治は農地改革の折りに残っていた貞治名義の財産を無償で保吉名義に変更し、恩義の一端であるとした。

また第三の11才になったばかりの貞治の下宿問題は「心配は限りがない」「貞治の将来に大きな夢を託す」と決断し、親戚筋の井川家（造園業）に間借りさせることにした。

かくして1886年6月、新設の岐阜尋常中学校へ貞治を入学させ、教育制度上の進学路線に乗せることができた。貞治の優秀さは勿論のことながら、勘助の先見性と肚を括った決断があってこそ、貞治に備わった天性の資質がうまく伸ばされる契機となったといえる。

## 〔5〕 結 び

岐阜県の農村から、明晰な頭脳の高木貞治が出現した。この天才的な高木貞治が、明治前半期の社会的環境のどのような影響を生かして伸びていったのであるか、その問題を多少なりとも解明したいと考えた。今回は高木貞治の生涯のうち幼少期に焦点を当てた。そのため貞治の家族と明治前半期の小学校教育までが中心となる研究のまとめである。

この調査研究をまとめる中で、明晰な頭脳、記憶力、洞察力、重圧に負けない強靱な意志、刻苦勉励して徹底的にやり遂げるなど、大成した貞治を評価するこれらの能力は父系側・母系側双方のよい面を受け継いだと思われる。

これらの資質や能力は、農家であった高木家の人々が自然環境の影響の下で鍛え、またその人その人を取りまく社会的環境の中で磨かれたものであった。これら累代の人々の資質や能力を貞治はよく受け継ぎながら、さらに家族や私塾および学校の師、そして明治前半期の教育制度が大成の道を歩ませたと考えられた。

幸いにも残存する貞治のノート類や作品化した遺品が整理途上であるこの機会に調査研究をしてみたいと思い取り組んだテーマである。

次回は、岐阜尋常中学校、第三高等学校、東京帝国大学時代の遺品を基に当時の学校教育の動向と貞治の勉学について調査研究してみたい。

## 注

- 1) 拙稿「社会科学習における人物指導（上）——近代文化の発展に貢献した高木貞治の業績——」, 聖徳学

園岐阜教育大学紀要 第32集, 1996, pp.267-284

- 2) 黒田成勝「高木貞治先生を敬慕して」, 高木貞治先生生誕百年記念会編『追想高木貞治先生』, 1986, pp. 234-247
- 3) 田村茂『現代日本の百人』, 文芸春秋新社, 1953
- 4) 高木貞治「中学時代のこと」, 『学図』(KK 学校図書) 第1巻3号, 1952。なお, 400字詰原稿用紙5枚半の直筆原稿が糸貫町教育委員会に所蔵されている。
- 5) 糸貫町編『糸貫町史』通史編, 1982, pp.95-96
- 6) 同上, pp. 4-13
- 7) 吉岡勲『ふるさと糸貫の歴史』, 1977, pp.111-118
- 8) 本田欣哉「高木貞治の生涯」, 『数学セミナー』, 1975年1月号, pp.11-16
- 9) この宝永の絵図は, 藪川の流域領主を色別に示したものである。元禄末計画され宝永年間に全国的に実施された「宝永の大取払」の一環の工事関係絵図であるが, 明細は記載されていない。『岐阜県治水史』の記録でみられる「藪川筋之内, 一, 石神村・更地村川通松不残取払, 一上秋村川通籠出シ出張候所取払」などの内容に関わるものである。大垣藩第4代藩主, 戸田采女正氏定〔1684(貞享1)年-1723(享保8)年〕が実施をし, 工事完成状況を船で巡検している。
- 10) 糸貫町編『糸貫町史』史料編, 1969, p.634
- 11) 高木家墓地(本巣郡糸貫町数屋地蔵786番地)。
- 12) 高木家文書(初代勘助文書)。『糸貫町史』史料編作成時には存在が確認できず, 今回(1998年8月)の調査で発見された。
- 13) 高木家文書(初代勘助文書)
- 15) 高木家文書(初代勘助文書)。
- 16) 本田欣哉, 前掲文献
- 17) 拙稿「高木貞治博士とその師 野川湘東」『吉岡勲先生遺稿撰集』, pp.392-404
- 18) 「地籍図」, 1889(明治22)年, 県へ提出の『数屋村土地台帳』を高木勘助が岐阜県尋常中学校4年生在籍の貞治に手伝わせて作成したものである(高木家文書)。
- 19) 高木家文書(二代勘助文書)
- 20) 高木家文書(三代勘助文書)
- 21) 同上
- 22) 『糸貫町史』史料編, p.41
- 23) 同上, p.73
- 24) 拙稿「高木貞治博士とその師 野川湘東」, 吉岡勲先生遺稿撰集編集委員会編『吉岡勲先生遺稿撰集』, 1994, pp.392-404
- 25) 岐阜県編『岐阜県史』通史編 近世下, 大衆書房, 1984, p.1054
- 26) 高木貞治遺品, 高木家から糸貫町教育委員会に寄託, 「高木貞治博士記念室」蔵。
- 27) 大意は, 岐阜教育大学名誉教授横山寛吾氏による。
- 28) 本巣郡一色尋常高等小学校編『学校沿革史』, 1918
- 29) 高木貞治『数学小景』, 岩波書店, 1943, pp.117-128
- 30) 高木貞治遺品, 高木家から糸貫町教育委員会に寄託, 「高木貞治博士記念室」蔵。
- 31) 同上
- 32) 『学校沿革史』, pp.150-151

## 参考文献

- 岐阜県編『岐阜県史』通史編 原始, 大衆書房, 1981  
岐阜県編『岐阜県史』通史編 近代上, 大衆書房, 1980  
岐阜県編『岐阜県史』通史編 近代下, 大衆書房, 1986  
岐阜県編『岐阜県治水史』上・下, 1953  
岐阜県本巣郡教育会編『本巣郡誌』上・下, 1937  
岐阜新聞出版局編『岐阜県災害史』, 岐阜県, 1998  
国土地理院発行「1／5万地形図」岐阜・美濃・谷汲・大垣・津島図幅  
『新選日本史B』(高等学校教科書), 東京書籍, 1996  
『新編新しい社会 歴史』(中学校用教科書), 東京書籍, 1996  
高井忠一郎『山添村志』, 糸貫尋常高等小学校, 1930  
高木貞治『近世数学史談』, 共立社, 1931  
高木貞治先生生誕百年記念会編『追想 高木貞治先生』, 1975  
高橋常義『糸貫川廃川史』, 本巣郡総合開発公社, 1982  
辻達也編『日本の近世 10 近代への胎動』, 中央公論社, 1993  
『日本大事典』全7巻, 平凡社, 1993  
『日本歴史大辞典』全20巻, 河出書房新社, 1974  
本巣郡糸貫町高木貞治博士顕彰会編『高木貞治先生』, 1994  
文部省『小学校指導書 社会科編』  
文部省『中学校指導書 社会科編』  
文部省『小学校学習指導要領』, 1998  
文部省『中学校学習指導要領』, 1998